

Life Design Focus

奄美・宇検村に学ぶ墓の共同化の試み

第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部 研究開発室 小谷 みどり

<無縁墓の増加>

先祖のお墓の維持管理に頭を悩ます人は少なくないだろう。継承者がいない無縁墓の増加は都市部、地方に限らず、わが国ではどこでもみられる現象だ。

こうした背景には、少子化や家族のかたちの多様化だけでなく、社会構造の変化や家意識の変化などが挙げられる。高齢世帯の核家族化、生涯未婚者の増加と高齢化、高齢夫婦の離婚の増加など、家族のかたちが多様化した結果、お墓の無縁化が進んでいる側面は大きい。そのため、これまでは長らく、無縁墓は個々の家庭の問題として考えられがちであった。

しかし、人口の地域間流動の激化によっても無縁墓が増加することが明らかになってきた。生まれ育った地域で一生を終えるというライフコースをたどる人が少なくなった結果、先祖のお墓が遠いふるさとにあるという人は少なくない。生まれてから一度も住んだことがない土地に先祖のお墓があるケースも珍しくない。国立社会保障・人口問題研究所の2011年「人口移動調査」によれば、居住地が出生地とずっと同じ人は10.7%しかいなかった。先祖のお墓のそばに一生住み続ける人の方が、いまや少数派なのである。

年に何度かはお墓参りに行きたくても、家族みんなで移動すれば交通費や宿泊費がばかにならない。おまけに年をとってくると、傾斜地にある霊園だとお墓まで歩くのが大変なうえ、草むしりや墓石磨きなどの掃除が重労働になって、ますます足が遠のいてしまうこともあるだろう。

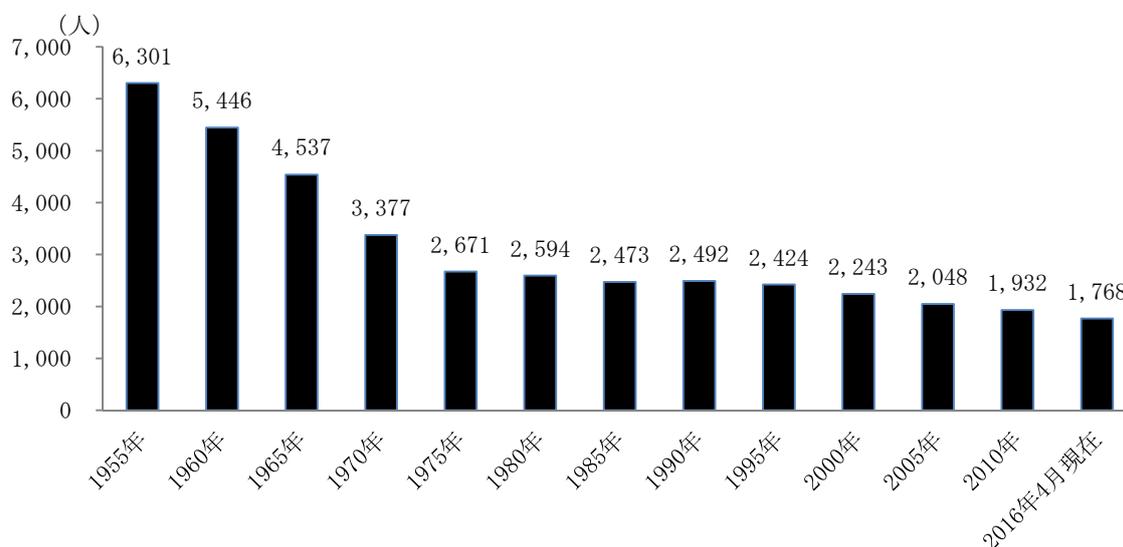
お墓を無縁化させないため、昨今、新しいかたちのお墓が続々と登場している。血縁を超えた人たちでお墓を共有するという考え方もそのひとつだ。子々孫々での継承を前提とする「家墓」に対し、いわゆる「永代供養墓」「合葬墓」「合同墓」などと呼ばれているお墓である。血族や姻族ではない人たちの遺骨を合葬する施設であり、故人の子々孫々が継承するのではなく、お寺やNPO、高齢者住宅、仲間の会、企業などの運営者が管理していく仕組みなので、葬られる人に跡継ぎがいるかないかは関係ない。公営の霊園でも合葬式のお墓を整備する自治体が増加している。納骨堂形式の合同墓だけでなく、ここ数年は樹木の下に多くの遺骨を一緒に納骨する樹木型の合葬墓を設置する動きが散見される。

＜宇検村の取り組み＞

そのようななか、奄美大島にある宇検村では、集落ごとに「精霊殿」と呼ばれる共同納骨堂を建設するというユニークな取り組みをしている。この共同納骨堂は、集落の居住者や集落出身者の遺骨を一つの納骨堂に納めて共同で供養している点の特徴として挙げられる。個々の家庭がそれぞれに墓を持つのではなく、集落で運営、管理している共同納骨堂は全国的にとっても珍しい。こうした共同納骨堂を設置する背景には、島外へ転出した人の先祖のお墓を親戚たちが守り続けるのは負担になってきたこと、無縁となったお墓が増えてきたことなどの理由がある。

宇検村の人口は1955年には6,301人だったが、減少の一途をたどり、2016年4月末現在で1,768人と、この60年間で3割以下となった（図表1）。

図表1 宇検村の人口推移



資料：総務省「国勢調査」、宇検村役場ホームページ

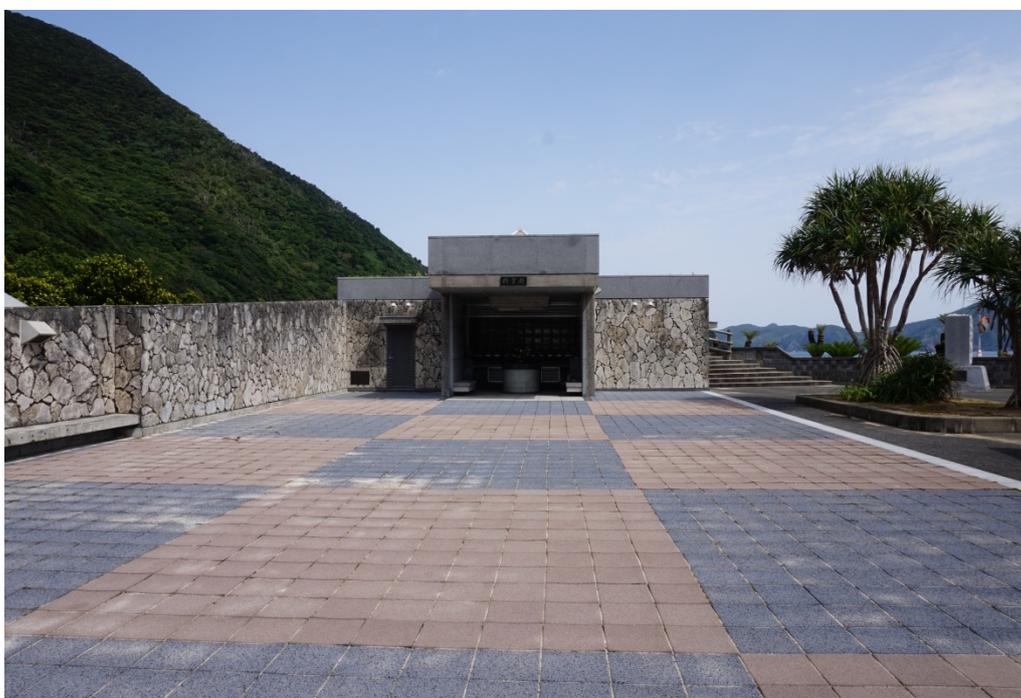
宇検村では、1972年に田検集落で最初の共同納骨堂が建設されたが、次に共同納骨堂ができたのは1996年の芦検集落なので、他の集落に波及するまでに24年間のブランクがある。しかしそれ以降、追随する集落が相次ぎ、2016年現在、14集落のうち8集落に共同納骨堂がある。

1996年に建設された芦検集落の共同墓は、納骨堂のまわりを囲うように、それまで使用されていた個々の家の墓石が並んでいる（写真1）。建設に当たっては、住民はもちろん出資したが、関西芦検会や関東芦検会など、芦検から出郷した人たちの親睦会に所属する人たちも1世帯あたり4万円を寄付している。寄付した出郷者には納骨権が付与されるという。芦検集落では宇検村にも支援を求めたが、集落墓地の建設を直接支援することは難しいため、村は墓地周辺を公園として整備した。

写真1 芦検集落の共同納骨堂



写真2 屋鈍集落の共同納骨堂



屋鈍集落では2000年に、これまでの集落墓地の跡地に共同納骨堂を建設し、遺骨を改葬した(写真2)。納骨堂の前部分は、八月踊りをするための広場を兼ねているため、とても広い。奄美では旧盆の送り日や旧暦八月に、集落ごとに八月踊りで先祖に感謝を伝える習慣があり、共同納骨堂のデザインにかかわらず、どの集落でも墓地に同様の広場が設置されている。

また宇検村に限らず、奄美では、毎月旧暦の1日と15日に墓参りをする習慣があるが、共同納骨堂では集落の人たちが持ちまわりで墓参りの前日に清掃を担当する。屋鈍集落には2016年4月現在で31世帯56人が住んでいるが、今年度の清掃当番者は全部で16人。年に2回ずつ清掃当番がまわってくるよう、シフトを組んでいる。

いまなお根づく熱心なお墓参りの習慣が、集落での墓の共同化へ駆り立てたという側面は否めない。島外へ出た親類縁者の墓をかけもちしてお参りする負担は、高齢者には大きいからだ。

総務省「国勢調査」によれば、2010年時点の宇検村の高齢化率は37.1%で、全国平均の22.8%よりも14.3ポイントも高い。国立社会保障・人口問題研究所「将来推計人口」(2013年3月推計)では、宇検村の高齢化率は2040年には45.8%に達するという。わが国では多くの地域で、高齢化と人口減少という共通の課題を抱えている。総務省の2011年10月時点の調査によれば、全市町村の45.1%、面積にすれば日本の国土の半分近くが過疎地域だという。民間研究機関「日本創成会議」は、2040年には全国1,800市区町村の半分の存続が難しくなるというレポートを2014年に発表したことは記憶に新しい。人口減少が止められない地域では、承継する人がいない墓は増えていくことは明らかだ。

集落の人たちのつながりが密だから可能になったということもあるが、過疎化が進む地域のこれからの墓のあり方を考えるうえで、宇検村の墓の共同化の取り組みは注目に値する。

(こたに みどり 主席研究員)